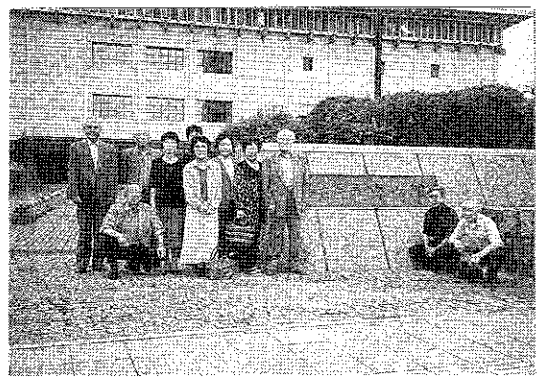
名古屋市博物館特別展

「伊藤圭介と尾張本草学」研修の記

当会研修部では11年度に奈良の森野旧薬園見学、12年度に京都の士清ゆかりの史跡探訪を実施、13年度は名古屋市博物館で本草学の研修を行うことになった。



9月27日　名古屋市博物館前で

聞きなれない「本草学（ほんぞうがく）」は薬草の学問と考えていたが、調べてみると薬になる植物を中心に、動物、鉱物などの自然物の薬効を調べる学問で、もとは中国の薬物学からきており、植物を主体にしたので本草学の名がつけられたという。日本では江戸時代に盛んになったが、西洋医学が導入されて次第に押されていったようだ。　谷川士清は、京都遊学の際に松岡玄達から医道、儒学とともに本草学（ほんぞうがく）を学んでおり、現存する“谷川家処方書”においてもその活用をうかがうことができる。師玄達と松坂の野呂元丈は江戸中期の本草学者稲生若水（じゃくすい）に教えを受けた兄弟弟子である。

今回の研修は平成13年９月27日に実施、参加者11名、無風薄曇りの穏やかな天気に恵まれた。名古屋駅前で早昼を済ませ、桜山の名古屋市博物館へ向う。事前に案内を頼んであったので、同館の種田学芸員が待っていて下さり、早速講堂に入り１時から約30分講義を受けた。伊藤圭介は名古屋で生まれて江戸時代末期に活躍した人で、翁の生い立ちや尾張本草学のルーツなどを丁寧に話していただいた。圭介は本草学は水谷豊文に学び、スウェーデンの植物学者の書いた“日本植物誌”をほん訳してリンネの植物分類を加えた“泰西本草名疏”を刊行した外、本草学の研究で標本、拓本、スケッチなど、多数の収集品を残している。

話を聞いているうちに谷川士清翁の著述の姿が思い出され、二人とも忙しい医者のかたわらで、すばらしい功績を残された真摯な生き方が重なって見えるようだった。

講座を終り、続いて展示場へ移って一点づつ懇切に解説して下さり、時間のたつのも忘れて観覧することができた。種田学芸員も当初は主なものだけ紹介するといっておられたが、私達の熱意に押されたのか１時間を超える説明になり、全員でお礼を申しあげた。

江戸時代の図譜は彩色でも保存がよく、他の医家の医療道具や書物もすべて貴重な資料としてゆっくり見られた。圭介は明治３年、68歳で東京に転居して文部省に所属、79歳で東大教授、86歳で日本最初の理学博士になり、晩年には多数の書画をのこしている見事な生涯であった。(99歳で死去)

（研修部・高倉俊孝）

❖ 編集後記 ❖

第３号は平常版に戻っての編集となった。

ことすが書道・絵画展は旧宅改装のため４月になり、結果は次号でお報せする。

編集会議でお手伝下さったのは、馬場、増井、吉川のお三方。印刷は会員の西尾プリントさん。

昨年春第２号を仕上げた直後元会員内海康子さんが亡くなったのだった。

友逝きて大日没の茜空

（万里子）